

2005年度学長方針

南山大学の皆さん

学長 ハンス ユーゲン・マルクス



2007年以降のいわゆる全入（ユニバーサル・アクセス）の時代を迎えて、大学を取り巻く環境は年々厳しさを増しています。本学がこうした状況を先取りして、若々しい未来志向で改革を断行し、成果をあげてきたのは、学的共同体南山を構成する皆さんの献身的な努力の賜物と感謝しています。今回再びこの共同体の舵取りを任されたことを大変な光栄と受け止め、5期目も精いっぱい務めさせていただき所存です。しかしながら組織のさらなる成長のため、今期を最後にしたいと決意しています。

したがって今期は、これまで行なってきた改革とその目的や目標などを振り返り、何がどこまで達成されたのかを真摯にレビューするとともに、さらに改革すべき事柄は何なのかを勘案し、新たな成長への具体策を策定しながら、10年後、20年後の展望をも皆さんと一緒に検討していきたいと思っています。中でも特に重視したいのは、選ばれる大学であり続けるためにアイデンティティないしは個性を一層前面に出すという、今やすべての大学に課されている問題です。昨年12月に開催した外部評価委員会からも、「南山大学としてのアイデンティティがどうも希薄ではないか」との厳しい指摘を承りました。

そこで、まずカトリック大学であるという個性を強調し、グローバル化が進む反面で異なる文明衝突の機会も増える中、諸文明間の対話の場をこれまでも増して提供しながら、なぜ今「カトリック」すなわち普遍的な広がりをもつ大学が必要か一層明確にしていきたいと思っています。しかし先の外部評価委員会からは「カトリックだけでは足りない」とも指摘されていますように、個性を一層前面に出すため、創立以来「語学の南山」として定着しているブランドに中身が伴うよう語学教育を強化し、さらには国内外から「国際交流の南山」と言われるよう、留学生の受け入れ・送り出しを増やしていきたいと考えています。いわゆる2007年問題も象徴するように、今期はわが共同体にとって重要な転換期になります。国内外で魅力ある大学として勝ち残るため、知恵と力を出し合ってくださいますようお願い申し上げます。

最重要課題

1. 外国語教育

私は、これまで数年にわたって外国語教育カリキュラムの抜本的な見直しの必要性を強調してきました。本学の個性をより鮮明に打ち出し、南山大学に対する社会の期待に応えるためにも、語学教育の改善および充実こそ今検討すべき最重要な課題です。昨年度の学長方針でも、語学学

習に対して意欲的な学生がしっかり勉強できる環境改善に向けて、十分に議論していただくようお願いしました。これに対して昨年度外国語委員会委員長より 2004 年度学長方針に添える文書が提出されました。その中では、本学の外国語教育が抱える問題を解決するための良いアイデアが示されており、ようやく改革への動きが見え始めたことを嬉しく思います。

本年度は、2007 年度に外国語教育カリキュラムの大改革が実施できるよう、具体的な改善策や改善目標に関して徹底した議論を進めていただきたいと思います。とりわけ、習熟度別クラス編成など、学生が自らのレベルに応じて自発的かつ意欲的に外国語を勉強できる体制づくり、特定の学科に語学教育の責任を任せてしまう現行制度の弊害を是正し、より集約的に語学教育を統括する外国語教育センターを設置する可能性、TOEFL や TOEIC の受験対策科目を学部科目として開講する可能性などが、重要な検討課題です。また、在学生の語学力がどの程度の水準にあるのかを客観的に把握する必要もあり、そのためには全在生を対象とする TOEIC の実施なども考慮に入れる必要があるでしょう。何と云っても「語学の南山」という定評に中身が伴うよう、第二外国語を選択必修とする現行制度の見直しまでも視野に入れながら、大胆な発想で議論を行なっていただきたいと思います。

最近では東海地区の他大学が「打倒南山」を明確に意識して、特に語学教育に力を入れていることを認識する必要があります。南山大学はもはや従来の評判だけに甘んじていることはできません。ひとりでも多くの学生がバイリンガルに近いかたちで少なくとも一つの外国語を使えるようになる教育をすることによって、「語学の南山」を学生が実感できるものにしたいと考えます。

2 . 国際教育の体制強化

私はこれからの 3 年間で、活発な国際交流という本学の特色を現在にも増して前面に打ち出していきたいと考えています。国際交流は、学生の海外派遣と、学部、大学院および外国人留学生別科での学生の受け入れを柱に成り立っており、これらはいずれも重要です。本年度は、特に外国人留学生別科の受け入れ体制強化への取り組みを重要な課題として掲げます。

南山大学では、世界に通用する大学を目指し、創立以来欧米との交流を中心とした国際教育に力を注いできました。わが国の思考変化に伴い、総合政策学部の主眼をアジアに向け、アジア諸国からの留学生受け入れを推進してまいりました。この取り組みを今後も維持しながら、国内外から「国際交流の南山」と言われるよう、これまでの実績を活かして、外国人留学生別科の受け入れ体制を強化するのが得策と言えます。最近では、とりわけ欧米からの留学希望者が増加していますし、アジア諸国からの問い合わせも増えてきており、南山への短期留学希望者は、実際に外国人留学生別科に在籍する学生数をかなり上回ります。活発な国際交流を特色とする本学にとって、こうした潜在的な留学希望者の受け入れ体制をより一層強化していくことは大変重要です。

しかし、受け入れ体制を強化するためには、まず本学の国際教育体制における外国人留学生別科の制度上の位置づけをはっきりさせなくてはなりません。大学改革の一環である 2000 年度の総合政策学部設置を念頭に、本学における国際交流を統括し支える体制を構築するために 1999 年 4 月に国際教育センターが設置されました。外国人留学生別科はこの組織の枠内で動いていま

すが、別科のあり方に関する議論は、これまではほぼ別科内にとどまっておらず、大学全体としてはあまり真剣に取り上げられてきておらず、位置づけも不明瞭なままで今日に至っています。南山大学の国際的知名度を高めているという別科の重要な貢献が、学内で十分に認知されていないことも、これに起因しているかもしれません。まずは本学における別科の位置づけを明確にし、その上で受け入れ増加の障壁になっている問題、例えばホストファミリーの数の不足、学年暦の問題、また教学に対する協力体制のあり方などを検討していく必要があります。

「南山にいながら国際交流」という標語を真に実現し、南山大学の国際的通用性を高めるためには、学生間の交流をさらに促進するとともに、これまでもまして受け皿となるしくみを強化し、より良い就学環境形成をめざしていかなくてはなりません。

将来構想

1. グランドデザインの検討

これからの大学は常に将来を考えながら自己改革を行なっていかななくてはならず、これを抜きにして大学に明るい未来はあり得ません。まさに、現在の南山大学の姿は、これまでの絶えざる自己改革の成果だと言えます。南山学園全体を見てみると、これまでは学園内の各単位校において個別に将来計画の策定が行なわれてきました。しかし、これからは学園全体の発展のために、学園としての大膽な発想に基づくグランドデザインが必要であると学園理事会が認識しています。すでに議論は南山学園総合企画委員会で始まっています。本学としては、まず学園全体を視野に入れ、どのように大学の特色を活かして教育・研究の目標を設定していくかを明確にする必要があります。

今後南山大学としてめざすべき大きな方向は次のようなものです。第1に、建学の理念を軸に、従来の「教育」「研究」に加えて「社会貢献」を全うすること。第2に、文理融合型の研究・教育拠点として産官学の積極的な連携に取り組むこと。第3に、地域での安定的な立場を固めつつ、かつ全国展開をめざすこと。第4に、学園内各学校との教育の連携を深めることです。本年度は、しかるべき議論の場を設けてグランドデザインの検討を始めます。

2. 財政基盤の安定化

魅力ある大学であり続けるためには、学生や社会のニーズに対応した将来構想のもと、財政基盤の安定化を戦略的に推進する必要があります。そのためには入学者の確保が前提となります。今後の大学評価においては、当然のことながら財政の健全性も問われます。一方で、魅力ある教学組織や施設整備のために多額の投資が必要となります。そのような投資は、南山大学の教育や研究はもちろん、地域社会への貢献や産官学連携をも含めた総合的な視点から南山ブランドの強化のためになされるべきでしょう。安定した財政基盤に支えられつつ崇高な建学の理念を具体化していくことが今後ますます重要な課題になってきます。

3. 大学院構想

2004年度は大学院に4つの研究科を、そして本学初の専門職大学院である法科大学院（法務研究科）を新設しました。さらに、3研究科の上に立つ博士後期課程（数理情報研究科は既設）および法科大学院に続く専門職大学院となるビジネススクールの設置検討・準備を進めてきました。博士後期課程については、新しいコンセプトで南山独自の大学院を作る可能性を検討していただくようお願いしました。結果として、博士前期課程の上に複数専攻を置く人間文化研究科の博士後期課程と、総合政策研究科の博士後期課程、およびビジネススクールを本年6月に設置申請することになりました。大学院の改組・改編については、同時代の社会のニーズに応えるものであるのか、定員充足と卒業生の就職が安定しているのかを軸に、今後しかるべきレビューを行っていく必要があるでしょう。またビジネススクールについては、短期的な視点ではなく、南山大学が果たすべき地域社会への貢献や産官学連携による教育・研究活動の拡充という中長期的視点から、積極的に取り組んでまいります。

教育・研究

1. 文部科学省による教育支援プログラムへの申請

近年、文部科学省は大学への補助金配分のシステムを変え、大学を競わせ大学の差異化をうながす方針を強化しています。今後この大学間競争は国内にとどまらず世界規模へとその舞台を移すことは明らかです。私たちはこのことをしっかりと認識する必要があります。

2004年度は、「21世紀COEプログラム」については採択に至りませんでした。総合政策学部から申請した「アジアを重視した国際教育の質的向上」などが採択されました。本年度は、学内応募の結果、4件の取り組みを申請します。数理情報学部から、社会的要請の強い政策課題に対応した「情報通信学と数理科学の融合によるあらたなソフト技術者の養成」をテーマに特色GPに申請します。また本学としては初申請となる「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」（現代GP）には、総合政策学部を中心として「南山大学瀬戸キャンパス英語プログラム（NEPAS）の試み」を、経済学部から「地域社会に開かれた消費者教育のコンテンツ開発と実践」の2件を申請します。さらに「魅力ある大学院教育」イニシアチブには、人間文化研究科教育ファシリテーション専攻より申請します。なお、「大学教育の国際化推進プログラム（海外先進教育実践支援）」など、今後毎年さまざまな支援プログラムに申請していきたいと思っております。南山大学における真摯な教育努力の継続的な積み重ねが採択という形で評価されることを大いに期待したいと思っております。

2. 授業評価

今年度は、昨年度に検討をはじめた大学院生による授業評価制度の仕組みづくりを具体化していく年となります。学部と異なり、大学院の場合は研究科毎に教育の方向性も異なりますし、受講生の人数という点からデータを統一的に処理しにくい面があります。それゆえ全学的に共通の

枠組みをつくるというよりも、むしろ各研究科において主体的に検討を進めていただく必要があります。必ずしも狭い意味での「授業」評価に限定されない、カリキュラムのあり方などをも含めたところで、大学院の研究・教育のあり方を総合的に点検・評価する仕組みを、ぜひ練り上げていただきたいと思います。

学部に関しては、すでに全学的な授業評価制度が定着しており、こうした体制を今後も継続させていくつもりです。ただ、成果をあげている他大学の取り組みを参考にし、新たな仕組みを模索する努力を怠るべきではありません。たとえば、「学生による授業評価」の自己点検・評価報告書の中には、残念ながら、真摯な取り組みという点でやや疑問を感じるものが少数ながら見受けられます。この点で、Plan-Do-Check-Action (PDCA) のサイクルを念頭においた具体的な問題発見・問題解決に資するような授業評価制度へと、現行の仕組みをさらに洗練させていくことが必要だと考えます。また、科目を三つのカテゴリーに分け、学期毎にローテーションを組んで実施するという現行の方式には、担当科目によってはその年度の授業評価に関わらない教員が出てしまうという問題もあります。場合によっては、全教員が毎学期少なくとも1科目以上の授業評価を受けるという方式の導入を含めて、現行の仕組みの改善やさらなる発展形態を検討していただきたいと思います。

3．FD活動のさらなる推進

従来、FD活動は自己点検・評価委員会が全学的な規模で実施してきました。今後は、法科大学院における活動に見られるように、学部・学科レベルでそれぞれ具体的かつ実践的なFD活動を行っていかなくてはなりません。言い換えるならば、これまで以上にボトムアップの力がFDの推進に当たって必要になります。そのために、自己点検・評価委員会と並行して仕事をするFD推進委員会（仮称）を新たにつくり、もっと自由な立場から活発な議論と活動を展開していただく体制づくりが、検討されていいでしょう。若々しい発想で、それぞれの学科・学部の個性をさらに鮮明に打ち出すような改善策を出していただき、これが束となって南山大学全体の活力となるようなFDの仕組みづくりに、十分なエネルギーと時間を割いていただきたいと思います。

4．大学評価

ご承知のように、大学の定期的認証評価は法律的に義務づけられています。これは日本の大学の教育・研究体制の質の保証を国際的な基準を視野に入れつつ行うためです。本学は、大学評価・学位授与機構、大学基準協会、日本高等教育評価機構の三つから、大学基準協会の相互評価（ピア・レビュー）をさしあたり選びました。本年度は2006年度に受ける予定の認証評価（相互評価）の準備を、大学評価ワーキンググループを中心に進めます。

将来的には、本学が定着させてきた自己点検・評価の仕組みを、ピア・レビューやポスト・テニユア・レビューなど、多元的な評価制度と有機的に組み合わせたシステムの構築に取り組んでいく必要があるでしょう。

5. キャリア教育

本年度より従来の職業指導に加えてキャリア教育を開始します。キャリア教育の目的は、学生に将来への夢や目標を持たせ、学ぶことの動機付けをし、学生の「職業的将来の準備」として、学問の方法を身につけさせ、進路や職業に関する理解を深めることにあります。初年度である今年度は試行の年として位置付けます。ガイダンスや講演会・ワークショップを中心に行い、それらに対する学生の希望や意見を参考にしながら、より良いプログラムへと発展させていきます。言うまでもなく、ガイダンスやワークショップを実施するだけではキャリア教育は成立し得ません。教員一人ひとりが学生に対してきめの細かいキャリア指導を行なうことは不可欠で、特にゼミの指導生に対する周知徹底とフォローアップは重要です。学生の「職業的将来の準備」に関する教員の理解こそキャリア教育の本質だといえます。教職員一人ひとりに、キャリア教育への主体的な関与をお願いしたいと思います。

6. 学外連携と地域社会への貢献

教育研究活動における学外機関や地域社会との連携は、世界に通用し、かつ地域に貢献する「グローバルな大学」をめざす本学としては大変重要です。昨年度は、豊田工業大学との間で、単位互換制度による学生の交流だけでなく、研究者の相互交流も始まりました。

また、「大学コンソーシアムせと」への参加も積極的に進めていきます。ご存知のとおり、大学コンソーシアムは、高等教育機関である大学が連携して地域づくりに貢献し、生涯学習活動への積極的参加によって新たな地域文化の創造をめざしつつ、同時に学生の交流、大学連携による教育活動の共同化・効率化、および大学機能と地域における学習機能との融合などを図ろうとするものです。大学や学生にとっては新たな地域貢献や実践的な学習の場になるといいますので、本学からも積極的な参加があることを期待しています。

また、数理情報研究センターを中心に産学官連携を推進してまいります。

入試と入試広報

1. 志願者確保策

2005年度入試における志願者数は、本学一般入試・全国入試・センター入試を合わせて18,213名で、前年比6.9%の増加となりました。昨年度は志願者数が大幅に減少しましたので、この結果にひとまず安堵しています。これも入試広報や高校訪問などの戦略を見直したことの成果であり、ご尽力いただいた皆さんに心から感謝致します。

本年度は、特に全国入試で予想以上の志願者を集めることができました。しかし、昨年比17%の増加分はひとえに東海地方の受験者増によるものであり、確実に足元は固まりつつあると評価してよい一方、全国展開という意味ではこの結果は謙虚に受け止める必要があります。

志願者増加の要因のなかでも、とりわけ年末の愛知・岐阜・三重の主要80校の高校訪問に効果があり、数理情報学部の志願者増はその現れです。しかし他方で、著しく減少した学科もありま

す。隔年現象もひとつの理由として考えられますが、重要なことは各学科がどのような学生に来て欲しいのかを一層明確にすることです。

2. 入試広報

上述のような状況の中でのとるべき入試広報戦略は、本学の地盤である東海地方の志願者数を維持するために従来展開してきた活動に加えて、全国的な入試広報活動を継続的に積み上げることにあります。入試広報と大学戦略広報との連携を一層深めるとともに、愛・地球博など全国が注目するこの地域の活力を、受験生に対するアピールに積極的に利用していく工夫も必要でしょう。

本年度は、NSC（瀬戸キャンパス）とNNC（名古屋キャンパス）におけるオープンキャンパスの同時開催、高校生の一体験入学、そして重点的な高校訪問を継続実施します。昨年度初めて行ったバスツアーでは、私も元気な高校生たちと楽しいひと時を過ごすことができました。このような取り組みの積み重ねが全国展開の面で効果を生むものと思いますので、バスツアーは本年度も継続します。独創的なアイデアをいただいたことを高く評価しています。全国の高等学校との連携強化については、本年度はとりわけカトリック系高等学校の訪問を重点的に実施することを提案したいと思います。全国各地から本学に進学している学生の地元における学校訪問もより充実させるべきでしょう。全学的入試広報に加えてそれぞれの学科が自主的にPRすることが最良の対策だと思います。そのための工夫をお願いします。

キャンパスライフ

1. 学生用マンション「フォワイエ南山」

これまで南山大学には全国から来る学生のための女子寮（マリアハウス）と男子寮（ヨハネ館）とがありましたが、これまで寮の運営と寮生の指導をお願いしてきた神言会とテレジア会の人的制約や、昨今の若者のライフスタイルの変化によりこれらを閉鎖し、これに代わるものとして「四ツ谷の里」と「メゾンやわらぎ南山」のふたつの学生用マンションを提供してきました。今年4月からは新たに「フォワイエ南山」が三つめのマンションとして加わります。「フォワイエ」とはフランス語で「家庭」を意味します。この学生用マンションはNNCまで徒歩約15分の好位置にあります。こちらは男子学生専用とし、これに合わせてこれまで男女共用だった「四ツ谷の里」を女子学生専用に変更します。これから「フォワイエ南山」も多くの学生に利用され、有意義なキャンパスライフを送るための一助となることを願っています。

2. キャンパス整備

収容定員増に伴い今後段階的に増加していく学生数に対して、現在の教室数で対応することには限界があり、NNCに新教室棟を建設することが決定されています。現在、新教室棟の構造と使用形態については検討中ですが建設にあたっては、何よりも学生にとって利用しやすい施設にすることが優先されるべきです。新教室棟の2007年度使用に向けて、まず本年度はその計画を

十分に練っていただきたいと思います。

N N Cの整備に関しては、学生食堂と学生関連事務室の物理的配置も重要な案件です。さらに、第2パッセスクエア（仮称）の整備は前学長時代からの懸案事項であり、出来るだけ早い実現に向けて改めて検討を始めていただきたいと思います。また、八雲校地の整備、特に山手通りに面した校門、および山手通りからN N Cへのアプローチロード建設の構想も検討すべきことからです。

N S Cの整備については、体育館とグラウンドの整備を中心に検討を継続していきます。